

- 1、詩編138から145編まで「ダビデ詩集」と名づけられている。ダビデ（理想の王）がヤハウエ（主）への信頼の一群の詩歌。詩編139編はその一つ。これにちなんだ讚美歌が『讚美歌21』には9曲（166, 434, 435, 212, 222, 509, 547, 95, 370, ）ある。例えば、13節「あなたはわたしの内蔵を造り、母の胎内にわたしを組み立てて下さった。」はエレミヤ書の「わたしは、あなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた」を連想させる。21-547番「生まれるまえから」は誕生日の歌である。
- 2、139編は6つに区分される。今日は前半4つ18節迄を取り上げる。
1節から6節。1節の「主よ、あなたはわたしを究めわたしを知っておられる」という告白はこの詩の枠組み。「究め、知る」（探る、認知する）は、この詩の鍵語（キーワード）。裁判で裁判官が被告を知るために、調べ尽くすという意味を背景に持つ。
- 3、「座るも立つも」「歩くのも伏すのも」は人間の行動全体を表す表現。神は、人に関心を持ち、人生のあらゆる歩みに同伴して、守って下さる。「主よ、あなたはすべてを知っておられる」(4)と告白されている。5節の「手をおく」は、祝福。聖書では、神の関係は、神の働きですが、抽象的にではなく、手の働きになぞらえています。手を取る、手がとどく、手とり足とり、手に汗を握る、手をかける、手を入れる、手を打つ、手を握る、手を貸す、手を煩わす、手当てをする、手間をとる、手をつなぐ、という我々が日々経験をする人のつながりの仕草になぞらえて語る。
- 4、7節-12節。神がどこにでもいてくださるという信仰の表明。「霊」は神との生きた関係。9節には神話的背景あり。
- 5、13節-18節。創造者なる神への讚美。詩人の人体解剖学的知識が前提されている。「わたしの骨も隠されてはいない」。存在そのものへの「感謝」。「果て」は「わたしが終わり」（18節関根訳）と訳すと「わたしはなお、あなたの中にいる」の意味がはっきりする。
- 6、詩人は創られたものとしての自分の終わりを自覚し、なおその上に、神が自分とともにい給うことを告白する。詩人は目に見える創造の世界の終わりから、その先に救済の世界の恵みを信じ告白している。「わたしたちは見えるものではなく。見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」（Ⅱコリ4:18）の信仰と通じるものがある。
- 7、北海道の教会では8月第二日曜に、どこの教会も永眠者記念礼拝が行われている。本州とは異なった教会歴を持っている。盆に合わせ里帰りをする人に合わせての習慣だという。旭川豊岡教会の礼拝に出席したが、沢山の遺影を並べての礼拝だった。遺影を見ると、その人の生涯の見える部分が想像できる。地上の生涯は、見える部分で構成される。しかしもう一方に、私たちには、見えない部分というものをそれぞれが与えられている。それは神のみがご存じである。そこがあるので何時までも対話があり新しい記念の意味がある。